

## 「京の着だおれ」考

奥村 萬亀子

### A Study on the Old Saying “Kyo no Kidaore (The people of Kyoto apt to expend on their dress so much so that they bring themselves to ruin.)”

MAKIKO OKUMURA

「京の着だおれ」は、京都人の気質を表わすものとしてよく使われる世諺である。しかし、この言葉の意味するところの「京都の人は着物道楽で、身代をだめにしてしまう傾向がある」というのが、そのまま京都人の気質かということ、そうは認められない。前半部については肯定されるが、後半部についてはむしろ否定的な見方がされる。では、この世諺は単に比喩的なものなのか、あるいはそれなりに歴史的背景を持つものなのか、こうした点を中心に考えてみる。

ある地域の特性や地域住人の行動様式の特徴は、他者の視線により、あるいは他との比較によりはじめて明らかになるものである。ここにとりあげようとする「京の着だおれ」という世諺も、京と他の地域との差が明らかになったとき、第三者的視線をもって評された言葉であろうと考えられる。それ故に京の人そのものは、自分たちの何が「着だおれ」なのか、しかと自覚がない。特にこの世諺が世に登場してから長い時間の経つ現代においても、なおこの世諺で「京」の特徴が語られる時、京の人々はとまどっているのではなからうか。

言葉の意味は、いわずもがな、「京都の人は着物道楽で身代をだめにしてしまう傾向がある。」（小学館『故事俗信・ことわざ大事典』）「京都の人が美衣をまとうことに心を傾け、家産を失う風習のあること」（『広辞苑』）と説明される。

京の町中に生まれ育った三人の女性が著した『京の着だおれ』（昭和50年版）という書がある<sup>1)</sup>。このはしがきでは、「きものを大切に作る執着みたいなものが、京の女には少しばかり強いので、着倒れといわれるのではなからうかとも思いました。そしてしまつな京女の中で、きものにほうけて着倒れはったお方のこ

とは、いまだに聞いたことがないのです。」と述べられている。また、シナリオ作家として活躍された依田義賢氏による『京のおんな』<sup>2)</sup>でも同様のことが述べられ、よほど大家の人か花街の人以外の京のおんなはしまつな暮しぶりであるとしている。この著者も京の町中で友禅関係の家職の家に生まれ育ち、京のきものと女を見つめて過した人である。実際、近年の京都の人たちの着るものにかかる費用は他都市にくらべ、決して多くはない。そのことは「全国家計調査」からも明らかである<sup>3)</sup>。

しかし、こうした世諺が成立するには、それなりの背景があったことは当然であろうし、その世諺が言い続けられるのには、この世諺が言葉の額面通りの意味だけではなく、その中に、多く京のイメージを投入し、ふくらませた形で用いられるということがあったからであろう。つまり、そこには京の染織品に対する憧れや、服飾美の演出法への共鳴、一方では衣生活における美的理想を求める京都人の生活態度への揶揄が込められていたのであろう。

以下、(1)江戸から見た京 (2)大坂との対比 (3)着飾る京 (4)「着だおれ」は虚像か実像か (5)京の生活意識、の順にこの世諺に込められた意味をさぐって

みる。

(1)

「京の着だおれ」という世諺が、いつごろから言われるようになったかをつきとめるのは容易ではない。まずは、先学の指摘に従って、この世諺がどのような使われ方をしているか見て行くこととする。その使用例は江戸後半期の文学に見ることができる。

例1、式亭三馬作『浮世床』(文化11年(1814)刊)の「初巻中」には、浮世床へやって来た上方者の商人体の男作兵衛が、江戸と上方の風の違いについて江戸者と論議する場面がある。話が気性の荒さということに及んだ時、作兵衛は、

「……京都は別て王城の地ぢやさかい男も女子のやうで万事がやさかたに優ぢやはいの」という。すると床屋の鬢さんは、

「京の着倒がなにをしつて。おれが去々年上方へ上つた時、京愛宕山へ登って居たら何所ともなしにざわざわはざはと音がするから海の鳴るのでもなしあの震動は何だと聞たら傍に居る人がいふにはあれは京中で茶粥をすする音のごつちやになつて響く音ぢやと云たが、おれもあの時は肝を潰したッけ」とやり返す。ここでは「着だおれ」が、食生活に吝嗇であることの対比として、ののしり言葉のように使われている。着るものに贅沢をしても食へることにはこんなに貧しく質素ではないかという江戸者の論法である。「京の着だおれ」つまり「京文化」へのコンプレックスを、何とか吹きとばそうとする江戸者の言ともみられる。生粋の江戸っ子である式亭三馬<sup>①</sup>は、こうした江戸と京との生活文化の違いを庶民の生活感情のレベルでよくとり上げている。『浮世風呂』(文化6年(1809))「二篇巻の上」には、「かみさまたちのはなし」が髪型の流行におよぶ場面が描かれる。

辰「一類は頸の上へ鬘がおっかぶさって居ましたが、又むかしへ飯<sup>かへ</sup>つて、些<sup>ちい</sup>ばかり貫て来たほどの島田になりました。その上に上方風を好このむものも出て参りますし、ホンニホンニ移り気なものでございますよね」巳「京形だの、京かんざしだのと、何でも珍しい事を好まず。お江戸の人はお江戸の風がいつまでも能うございますよ。」

この会話からは、この時期になってもやはり京風のものへの憧憬があり、京風が流行となったことがわかる。それをにがにがしく思う江戸者の対抗意識が描かれるのである。また同じく「三篇巻の下」には、「二十三四のとしころにてよめと見ゆる女」の会話の場面がある。表を通ったおかみさんの衣装について噂話をして

壁「さうさのう、それだから髪結床の前を通るのは耻かしいよ。先刻通った人も立派な事さ。髪が上方風で化粧まですっぱり上方さ。鼠色縮緬<sup>ねづみ</sup>だっけ

が伊豫染に黒裏さ。とんだ能<sup>いいあが</sup>上りだった。あひ着はずっと茶返しの比翼で緋縮緬の縹絆。やっぱり白えりをかけて黒縹子の帯。どうもいへねへ風俗だっけ。」さらに流行談議は続き、

お家「そりやァ能<sup>い</sup>が、なぜあんなに上方風を嬉しがるだらう気がしれねへよ」

お壁「そうさ。あのまァ化粧の仕様を御らんか。目のふちへ紅を付て置て、その上へ白粉をするから、目のふちが薄赤くなって、少しほろ酔といふ顔<sup>がんしよく</sup>色に見えるが、否<sup>こつ</sup>な事たねへ」

といわせている。そして、上方では町方の女中が役者の真似をするものだから、江戸の女までが見よう見まねで、ちらほらと真似するものがあるといっている。

このように上方を強く意識し、江戸の風をそれに対抗させ、上方を揶揄しようとする姿勢がある。大田覃が『半日閑話』(明和5年(1768)～文政6年(1823))に至る市井の見聞雑記に記している「京風いろは短歌稿」にも、そうした意識が強くあらわれている。その一部をひくと、

「て、てんでに芝居見る時は  
あ、あさからわりごかつぎ出し  
さ、さじきの上のにぎりめし  
き、きらを飜れる其妻の  
ゆ、ゆもじは半分さらしなり  
め、めに見る物はなに事も  
み、みに聞いたと大ちがい  
し、しらぬ京もの語りをば  
ゑ、ゑどにくらべてうつくしく  
ひ、ひとに語るとおもへども  
……………

右はへぬきの花の江戸っ子五七 小便くさき京都の旅館に戯述

とある。京の人たちは上べはきらを飾っているが、その内実は実にしまつなものであると揶揄しているのである。

例2に十返舎一九著『東海道中膝栗毛』七篇序(文化5年(1808)刊)の記述をとりあげる。その冒頭部は、

「……殊に花の春、紅葉の秋は、東西南北に、名だたる勝景の地あつて、加茂川名酒の樽とともに、人の魂をとばしめ、商人のよき衣きたるは他国に異にして、京の着だをれの名は、益々西陣の織元より出、染いろ花やぎたるは、堀川の水に清く……」と京の地を紹介している。ここでは『浮世床』の例とはや、趣を異にし、まず春秋の都の美しさを述べ、商人がよい衣服を着ていること、西陣織や染いろの花やぎが、京の着だおれの名を高からしめるものとして描かれている。「京の着だおれ」は、染織産業の盛行を担った語として、勝景の地、京をさらに美しく彩る京の特質として、いわば処<sup>い</sup>ばめに使われている。

例3に『浪華の風』をあげよう。安政丙辰三年(1856)正月二十三日起筆とあり、著者久須美祐雋はこのころ大坂町奉行に転じ、「少しく暇ある間に間に、市中の有様など見聞に及びしことを、筆に任せて書付け」たとされる。ここでは、

「諺に京の着倒れ江戸の食ひ倒れといふ如く、浪花の地も京師と同様に衣類をば殊に貯ふる風俗なり、身上相応のものは姑く置いて不<sub>レ</sub>論。」

と、京と江戸とを対比させ、普通は京と対比させられる大坂を京と同等に述べている。以下、彼の述べるところを見てみよう。

「裏屋住にて纔に夫婦暮しのものにてても、衣服は分に過て貯へり。日々の盗難訴へにてても、右様夫婦暮しにて、日雇稼ぎなどの貧窮ものといへども、衣類の五六品位は盗み取らるゝこと平常のことなり。是江戸にて裏屋住の其日暮しのもの杯には、決してあるまじきことなり。市人女の着類杯格別江戸と違ふもなけれども、相応のもの、娘子供杯つるゝ程のものは、惣模様のふり袖着たる多し。衣服の着様など、前をば深く合すれども、下た前を重て深く合せ、半ば外へ折返し、其の上へ上前を浅く重る故、下前の裏模様よく顕れて、下<sub>レ</sub>腰巻等あらはにて、甚だ自墮落なる風態なり、帯は巾広きものにてても折返し締ることなく、巾の儘にて前後とも斜に打違へて<sub>レ</sub>るなり……」

「衣服も中より末のものは、子供杯都て緋の木綿を用る多し。木綿地合よろしく、殊に京染故に色合宜しく、縮緬と見紛ふなり。」

などと記している。江戸と上方の衣の文化の違いを見てとっており、「着だおれ」の内容とも云うべきものとして、日雇稼ぎの裏屋住の人たちでも五・六品位は泥棒にとられるほどのものを持っているという上方における衣生活の底辺の高さ、市中の相応のものは惣模様のふり袖を着ているものが多いという華やかさ、ゆったりした着物の着方の特徴、京染の質のよさなどの指摘が目立つ。

因みに、大田南畝の『所以者何』<sup>5)</sup>(享和元年(1801)記)に次のような記述がある。

「大坂は宝暦・明和の頃迄は、男女衣服其麗にして、世諺にも京の着倒れ、大坂の喰倒れ、堺の建倒と申候処、唯今にては安永頃より男女衣服殊の外花美になり申候て……」

これは、大坂が京と同様に「着だおれ」として扱われる事情を理解させるものである。

例4に石川明德<sup>6)</sup>による『京都土産』(元治元年(1864))をあげよう。

「中以上之者は勿論薪等首に戴く樵婦、或は野菜等をひさく極卑賤之者に而も、垢つき揉めよれたる衣服を着する者なく、たとへつぎつぎに而も皆なく洗ひ張り折目のしかといたするを着する事なり。

世の諺に江戸の食ひだおれ、大坂の観だをれ、京の着だをれと申なれば、京は衣服者皆花やかに美事なり。右三つは何れも風俗の弊なれとも、衣服は跡へ残る事なれば弊之内に而は宜敷と云ふべし。」

として、京の人たちの装いが花やかなのは勿論、卑賤の者までも小ざれいに身を整えていると賞めている。

以上は江戸の人から見た京都観であり、「京の着だおれ」の語を引いて語られる時、そこにはいくつかの京の特質が含まれていることがわかる。

一つは京に対する揶揄である。「京の着だおれ」は京の人の吝嗇との対比で取り上げられる。うわべはきらきらしく飾るが内実は貧しいとみる。一つは染織業の盛んな地であること、その染織品の華やかさの美しさが、背景にある京の地の美しさを一層引き立てていること、また、染織品の生産地であるが故の衣生活のレヴェルの高さ、江戸とは違った華麗さ、装いへの意識の高さなどをこの語に当てている。

江戸後半期における江戸の人々の京都見聞記には、「京の着だおれ」という言葉こそ使わないが、これらのいずれかに類した京都観がみられる<sup>7)</sup>。

## (2)

ところで「京の着だおれ」に先がけて使われたのではないかと思へるものに「京は着て果、大坂は喰うて果る」の世諺がある。元禄15年(1702)刊になる『元禄曾我物語』(都の錦作)<sup>8)</sup>の一節には次のような場面がみられる。

「何日の頃かや京の安房と大坂の粹と伏見舟に乗合て、京の安房が話には、大坂は水が悪うて染物洗物がならぬ。晒の帷子を一度水へ入れば玉子色になり、三度洗へば鼠色になるといへば。

大坂粹 なんぼそちの水をほめさしやっても、京にはない物が多い。先大坂の様なひちひちはねる鯛があるまい。

京安房 そんなら糸織の類がなるか。

大坂粹 料理した泥籠があるか。

京安房 くくし鹿の子や紅染は都でなければならぬ。

大坂粹 天王子蕪と浮無瀬の盃は都にやない。

京安房 最早いやるな四も五もいらぬ。天照大神に続いては、唐にもない禁中様が御座ります……

といはれて大坂者口が開ぬ。実に誠京は着て果、大坂は喰うて果るとかや。京の者の問様は皆衣類を以てし。大坂者は食物自慢で返答する事。さりとて下卑た所じや。」

京安房と大坂粹の二人のやりとりに、筆者は「京は着て果、大坂は喰うて果るとかや」と巷にいられている説ももっともと納得した態度で筆を運んでいる。これによると、少くとも元禄の頃には、すでに京と大坂の気質の違いが世諺として一般化していたことがわかる。しかし、「着だおれ」という語は使われておらず、「着

て果」といわれている。つまり「死ぬまで着るもの  
ことを考えている」とでもいった意味であろう。

この京安房と大坂粹のやりとりは、いわゆるお国自  
慢である。自分の国にはどんなに素晴らしいものがある  
かの自慢である。この時期、二つの都市は自他ともに  
認める明確な特徴を持っていたことがわかる。京都は  
すぐれた染織品、大坂はそれに匹敵する食の豊富さを  
誇っていたのである。

京都の染織産業は16世紀末以降の西陣の発達によ  
り、17世紀初頭には全国に抽ん出たものとなる。16  
世紀中葉までは京都を凌駕するほどの威勢を示してい  
た堺の機業も、17世紀初頭には、その地位を京都に  
奪われたといわれる。寛永15年(1638)の『毛吹草』  
第四名物の章は、「從<sub>レ</sub>諸國<sub>ニ</sub>出<sub>ル</sub>古今<sub>ノ</sub>名物聞<sub>レ</sub>触見<sub>及</sub>  
類載<sub>レ</sub>之但<sub>レ</sub>庭訓用<sub>分</sub>除<sub>レ</sub>之」として各国の産物を  
列記しているが、「山城」の条の名物は他と比較にな  
らないほど多く、特に染織関係における種類の多さは、  
目を見はるばかりである。<sup>9)</sup> 後の『雍州府志』(貞享  
元年(1684))の「土産門」も同様に多くの染織関係  
の品をあげ、それぞれに説明を加えている<sup>10)</sup>。

一方、大坂も17世紀後半期には食の都市としての  
性格づけが確立していた。大坂は元和5年(1619)江  
戸・大坂間の海運が開け、いわゆる菱垣廻船が運行さ  
れ、寛文12年(1672)には西廻海運が整備されるこ  
とにより、多くの物資が運び込まれることとなる。瀬  
戸内海にひらけた立地条件や大規模な河川開発によ  
って寛文期(1661~1672)前後には、大坂は「天下の台  
所」として繁栄していたといわれる。もともと海に面  
し、河内平野を擁した大坂が豊富な食物の産地として  
恵まれていたが、それに加え物資の集散地としての  
「天下の台所」という位置づけが、染織品の生産地と  
しての京都と対置されることになったのであろう。

「京は着て果、大坂は喰うて果てる」との世諺が巷  
間に広まるのは、これら産業との関わりによる都市の  
性格の確立が基盤にあることは当然であるが、同時に  
そこに暮らす人々の気質や生活様式によるところ大で  
あろう。京の場合を考えるならば、優秀な多種の染織  
品が生産されるというだけでなく、これら染織品は華  
麗な服飾生活の展開を導き、都市の繁栄を彩ること  
になり、それが京の特質として人々に強い印象を与え  
たことであろう。

### (3)

それでは17世紀後半から18世紀にかけて京の人々  
の服飾の状況は、どのようにとらえられたであろうか。

このころ大坂を中心に活躍し、町人社会を多く描い  
た井原西鶴(元禄6年(1693)没 享年52才)の作  
品から、京の姿がどう描かれているかを見てみるこ  
とにしよう。彼の作品の舞台は京、大坂、堺、奈良、長  
崎、江戸と広範囲にまたがっているが、それらの中で

京を扱った作品に京の服飾の様子はどのように描かれ  
るだろうか。

『日本永代蔵』(貞享5年(1688))巻三「国に移し  
て風呂釜の大臣」に、豊後の国で長者となった男が京  
へ上った時の様子が描かれている。

「其後、母親同道して、京の春に逢り、何国も花  
の色香に違ひはなく、花みる人の違ひ有。おもし  
ろの女臍の都や、山も川もちらぬ花の歩行をみて、  
『かなしや、いかなる因果にて、田舎に生れけるぞ』  
と我国元の事を忘れて、毎日の遊興に気を乱しける。」  
京の春を舞台に散らぬ花つまり美女たちが行きかう情  
景は他国には見られない華やぎであった。京の春の景  
色は女性たちの美装によって、よりあでやかに彩ら  
れたのである。男の感嘆のさまが目に見えるようである。  
『好色一代男』巻四「目に三月」でも、冒頭の部分は、

「げにげに花の都、四条五条の人通り、むかし見  
し山の姿もかはり(略)『我恋は唯御上家の女中』  
と浪屋が腰掛にしばらく居て、遠国とは違ふて、是  
は是はそれはと見るに、下には水鹿子の白むく、上  
にはむらさきしぼりに青海波、紋所は銀にてほの字  
切ぬかせ五所のひかり、帯はむらさきのつれ左巻、  
結び目の後に絆目のすみに鉛のしずを入……」

と、久方ぶりに見る京は東山の山容が変わり<sup>11)</sup>、街が広  
がっているが、東山を背景にした美女の装いも目を見  
はるばかりであるといった情景を描く。

これらに見る京の描き方は、能にうたわれた伝統的  
な京の見方をふんでいる。<sup>12)</sup> 能では、美しく着飾った  
女たちが花にさそわれて袖をつらね行き交う春の景色  
が、京を最も京らしく華麗に描き出す表現法として定  
着しているのであるが、何も西鶴がそれを型通りにふ  
んだわけではなく、こうした京の春が、この時代にお  
いてもまさに実感できるものであったが故の描出であ  
らう。そのことは、『江戸参府旅行日記-ケンペル』  
(元禄4年(1691))中の叙述でもわかる<sup>13)</sup>。ここでは  
伏見から京へ入る日の様子を次のように描いている。

「今日は日本人にとっては〔旧暦の〕朔、すな  
わち新しい月の一日目で、彼らは神社仏閣に詣でた  
り、散歩したり、いろいろな見世物を見に出かけたり  
して、この日を過ごすのである。(略)長い街道  
は、近くの神社仏閣に喜んでお参りする京都の人々  
の群れで溢れていた。婦人たちは、この霊場参りを  
する時には特に化粧し、色とりどりの京風の高価な  
衣装を着ていた。」

京の女たちが神社仏閣の縁日に華やかな装いで出かけ  
る様子である。いわゆる物見遊山にきらを飾って出か  
けるのは京の町の特徴であった。他国から京へ来た人  
には、それがひととき印象的であったらしく、同様の  
記述は、元禄11年(1697)から翌年にかけて京を訪  
れた加賀藩士浅香山井の紀行文『都の手ぶり』にもみ  
られる。「愛宕参り」の条に、櫛の枝を買いもとめ肩

にうちかついで帰る人々のことを、他の地方にはみられない美しいものと記している。

「ことに童男童女のゆふにやさしきが、色よき衣裳にて襦をかざして、あまたつれ立て帰るありさまは、またことかたにはたぐひもあらぬ見ものなり。」

西鶴は、伝統的な京の描き方を背景にとらえながらも、確実にこうした当代を描いているのである。

『好色五人女』(貞享3年(1686)刊)巻三の「中段に見る暦屋物語」は、京のおさん茂右衛門の実話によるものである。その書き出しの章「姿の関守一京の四条はいきた花見有」には、京の町の春を彩る当代の美女たちの姿が描かれている。

洛中にかくれなきさはぎ仲間の男四人が、春も深くなった一日、今日ほど「見よき地女」が出たことはない、藤の花見帰りを待ち受け、よい女を書き留め慰めとする。趣向をこらした装いの美女が多く通るなか、一つの欠点もなく、これぞと思われる女は室町のさる息女であった。その装いは次のように描かれている。

「髪すき流し、先をすこし折もどし、紅の絹たゝみてむすび、前髪若衆のすなるやうにわけさせ、金もとい髪ゆはにて結せ、五分櫛のきよらなるさし掛、まづはうつくしさ、ひとつひとついふ迄もなし。白しゅすに墨形の肌着、上は玉むし色のしゅすに、孔雀の切付見へすくやうに、其うへに唐糸の網を掛、さてもたくみし小袖に、十二色のたゝみ帯、素足に紙緒のはき物、うき世笠跡より持せて、藤の八房つらなりしをかざし、見ぬ人のためとはいはぬ計の風義……」

この娘が、後に経師屋に嫁すおさんである。この場面は、当時黄昏の藤として有名であった東山松原の安井御門跡眞性院内の藤の花見の帰路であり、美しい装いの娘がかざした藤の房は、その美しさに一層色を添え、その姿は能「藤」のことばをふんだものである<sup>94</sup>。このように古典に根ざした表現をとりながらも、ここに登場するのは、まさに当世風俗であり、当世を代表する町人の娘である。京の春、花の名所、物見遊山、装いをこらした女というのは、花の都を連想させる伝統的な主題であるが、この時期、町人社会の発展の中で、京の春の女たちはひとときわきらびやかなものであったことがうかがえる。

また、『世間胸算用』(元禄5年(1692)刊)巻四「闇の夜の悪口」には、一代栄花に暮らす旦那衆の衣くばりの話が記される。

「例年の衣くばりとて、一門中、下人ども、かれこれ集めて男小袖四十八、女小袖五十一、小だち中だちの小袖廿七、合して百式十六笹屋にて調のへ、それぞれに給はりける。此小袖代をもてば、商ひの元手があるぞ。」

「来る春や四方へ霞の衣くばり」(『毛吹草』)とあるように、春を迎える華やいだ京町人の生活のさまである。

このように染織品の産地としての京は、その装いや衣生活の習慣において他国にみられない華やかさを持っていたと思われる。

(4)

「京は着て果」という言葉を納得させる17世紀後半の京における服飾の状況を見て来たのであるが、それでは「京の着だおれ」という語もこれと同意味にとらえてよいのだろうか。何故「着て果」ではなく「着だおれ」なのか、比喩的に云い代えただけなのだろうか。しかし、「たおれる」というのが「損が多くて立ち行かなくなる」「破産する」などの意味を持つならば、「京の着だおれ」の諺も当然その意味に解釈される。とすると「京の着だおれ」というのは、はたして実像なのだろうか、虚像なのだろうか。

西鶴は町人物において、知恵や才覚によって大きな成功をおさめる町人の例を語ると同時に、分限者でも二代目三代目になると奢りに走り、滅んで行く様子を多く描いている。『世間胸算用』巻一「問屋の寛闊女」では、当世町人女房の衣装の贅沢が冥加恐ろしき事であるといい、分散しても、女房の衣装だけは手許に置くことが許されるので、これを次の商売の元手にしようというのだろうかや皮肉に言っている<sup>95</sup>。

また『西鶴織留』(元禄7年(1694)刊)巻一の三「古帳よりは十八人口」には、大坂堺筋の商人の場合が描かれる。親の代から次第に大きくして来た商であるにもかかわらず、このところ年々手づまりになって来たのを息子が嘆くと、母親は「爰はいひ所」と男の如くひざを立て、畳を叩いて言いつるのである。自分の世帯の時は、すべてに質素で勤勉に細心の心づかいをして暮して来たが、それに引きかえ今はどうだと言いつてるのである。

「我等も、ふだんは花色染のもめんきる物に、紬の帯一筋にて姿を作り、娼取振舞の時にも、浅黄にちらし菊の絹の物、しゅちんの帯に紫革足袋にて花をやりしに、今是のおかたの常住の風俗を見るに、肌着に白小袖をはなさず、中には鹿子、上には黒羽二重のひつかへしに、藤車の紋所いとうを確程にして付て、役者のきそふなる袖口、百品染の白じゅすの帯を、腰の見えぬほどまとひ」

以下、お化粧、髪飾り、小物などあらゆる生活用品の贅沢を並べあげ、

「花見、紅葉見の駕籠、芝居の替り替りに棧敷をとらせ、中居・腰元・お物師つれて、針を蔵につみたればとてたまることにはあらず、諸事に付て、内證の奢より身体をつぶしぬ。」

と続ける。これらの話は女の奢りによって身代が傾く、つまり絵に描いたような「着だおれ」の例である。「着だおれ」とは、こういうことを言うのであろう。延宝から元禄のころの奢りの傾向の激しくなる様相を

描いているのである。『日本永代蔵』巻一「昔は掛算今は当座銀」は、京におけるこうした例を描く。

「古代にかはって、人の風俗次第に奢になって諸事其分際よりは花麗を好み、殊に妻子の衣服、また上もなき事共、身の程しらず、冥加をそろしき、(略)近年小ざかしき都人の仕出し、男女の衣類品々の美をつくし、雛形に色をうつし、浮世小紋の模様御所の百色染、解捨の洗鹿子、物好各別世界にいたりぜんさく、女の身持、娘の縁組より内證うすくなりて、家業の障となる人数しらず、……」

こうした女たちの衣服への欲望をあおるかの如き新趣向の美服が、室町あたりで作り出され、大いに人気があった様子が描かれる。

「京の着だおれ」の語を素直に解釈するならば、まさにこの記述のような状況を指すのであらうと思われる。それでは本当にこのころ、女の奢りが家業のさわりとなった町人が「数しらず」という程あったのだろうか。

三井高房による『町人考見録』を見ることにしよう。これは享保13年(1728)の序文を持つもので、過去数十年にわたって没落した町人の例をあげ、その行動を批判し、家業運営のための心得を書き残したものである。ここで家を没落に導いた原因として最も多くあげられているのは大名貸しである。京都の豪商の多くは金座・銀座の座人や呉服商として政権に密着して地味にかせいだ商人で、こうして蓄えた富を大名相手の金融という形で運用しようとしたが、それがうまく行かず家を衰運に導くことが多かったという。次いで多いのが奢侈である。「大方奢りより物入も多くなり入拂の算用不合」「身の奢りより身体の薄くなり」などと記されている。この奢りの内容については「銀座」の項に記される銀座町人の栄華から没落のさまに一例を見ることができる。

「……纔に十年計の内に、銀座中家財共に沽却し、末末は大方今日も続がたく、或は下京辺にて浅間しき切手燈籠を細工致し、又は浄瑠璃を語り渡世いたし候ものの有之、(略)世盛なる時は、夜普請をいたし、家蔵を建、見るをみまねに道具茶器を我も我もと求め、能囃子見物参詣には衣服をかざり、両替町風とて一際人目にかかる出立、妻子は乗物にのりちらし、腰もと召仕までそれぞれと風情ありて花々敷有様、いつしか夫に引替、家蔵もこぼちて売拂ひ……」

元禄8年(1695)にはじまる金銀貨の改鑄は、勘定奉行荻原重秀と銀座町人たちに莫大な私財をもたらしたのである。しかし、新井白石により新通貨政策が打ち出され、正徳4年(1714)には、彼らに対して肅正が加えられる。銀座年寄中村内蔵介は、この時、深江庄右衛門、関善左衛門、中村四郎右衛門等とともに罪を得る。内蔵介は荻原重秀に貨幣改鑄をすゝめたということに加えて、身分不相応な過奢が罪状にあげられ、

闕所・追放となった。<sup>96</sup> 内蔵介はその盛時、尾形光琳と親しくし、彼のパトロンでもあった。光琳は内蔵介の妻女の東山での衣裳競べの演出を担当し、彼のアイデアが「流石光琳の物数寄なり」と人口に膾炙された話は、好んで伝えられるところである。『翁草』はその場に集った妻室たちの奢侈ぶりと趣向とを詳しく記している<sup>97</sup>。また次のようなことも述べている。

「金銀を以て歓楽は、凡そ心に任せずと云事なく、あらゆる事を仕尽しぬ、此の上に京都根生ひの町人に参会せざる事を不足に思ひ、是に交らばやと志して」

茶事を催して京都根生ひの町人を招待したけれども、

「今時めくと雖も、銀座の役人なり、兼て聞及ぶ処、其志尤も賤し」

といて何度招待しても彼らは参会しなかったという。その根生ひの町人の一人、那波屋九郎左衛門については、やはり『町人考見録』に繁栄から衰退の様子が記されている。「七八十年以前は京壹貳番の有徳者」であったが、親の死後「段々奢りの余り」家運は衰え、弟十右衛門家は「三十年程以前」(元禄ころか)潰れたとされる。この十右衛門についても女房が江戸の石川六兵衛の女房と衣裳競べをした奢りのものであることが伝えられている<sup>98</sup>。

『町人考見録』「呉服所共」の項でも、

「何れも身上よろしきは無し之(略)今はむかしの由緒久しき出入のかんばん迄に、少々ヅゝの註文を受、御公家様の御殿の様に家は大きく、人はすくなし、上京の家々も鳥のねぐらの声立て……」

と京町人の衰退の様子が述べられ、尾形光琳もまた、呉服商の没落を身をもって体験した京商家の出自である。

こうした京の豪商たちの衰退につながる奢侈の実態は、女たちの衣装に贅を尽しての物見遊山の姿によって人々に強く印象づけられたであろう。

18世紀後半期には「京の着だおれ」の世諺が一般的になっていたその背景に、こうした京町人の奢侈と没落を考えざるを得ないのである。

(5)

さて、このように見て来ると世諺「京の着だおれ」の成立の背景にある京と、「着だおれ」の語で語られる京都観、現代京都人自身の意識との間には、合致と齟齬との両面をみることができる。

染織品の産地としての京の服飾の華麗さという点については異論のないところである。また華麗な服飾美を一層引き立てる舞台として京の風景があり、年中行事があり、物見遊山を楽しむ生活様式があることも、伝統的な京の姿として認められた。時と空間、あるいは自然と行事が服飾美の背景になって、総合的な美的空間を作り出す時、これが正に「京の着だおれ」かと

他郷人の目に写るのである。

夏目漱石著『虞美人草』（明治40年(1907)刊）は、二人の青年が春の京都を訪れる場面から始まる。一日を嵯峨に遊ぶ彼らも、こうした京を見るのである。

「嵯峨の春を傾けて、京の人は繽紛絡繹と嵐山に行く。」

「天龍寺の門前を左へ折れば釈迦堂で右へ曲れば渡月橋である。京は所の名さえ美しい。」

「出逢うは皆京の人である。二条から半時ごとに花時を空にするなど仕立てる汽車が、今着いたばかりの好男子好女子を悉く嵐山の花に向かって吐き送る。『美しいな』と宗近君はもう天下の大勢を忘れている。京ほどに女の綺羅を飾る所はない。天下の大勢も、京女の色には叶わぬ。『京都のものは朝夕都踊りをしている。気楽なものだ。』」

しかし京都のものたちは朝夕都踊りをしている訳ではなく、その綺羅を飾る装いは、江戸者たちの多くが指摘したように吝嗇と腹合わせにある。

「着だおれ」た町人たちの作りあげた美的生活、それは京の人たちにとって一つの理想であった。

『日本永代蔵』巻五「世渡りは淀鯉のはたらき」では「お娘子の正月小袖、紫の飛鹿子に紅裏、是でこそ春なれ」と、そのできない貧しい者に言わせている。そして鯉売りから身を興した商家では「風俗も自から都めきて、新在家衆の衣装をうつし」と、根生いの町人と同じ装いをする。また『世間胸算用』巻三「都の兒見せ芝居」では、五、六人の若者が姿をやっし棧敷に陣どり我もの顔に振舞っている様子が描かれている。彼らはみな川西の人間、つまり職人・小商人であるが、「中京の衆と同じ事に、大きな兒がおかしい、知らぬ人は歴々かと思ふべし」と、その服装や態度が評される。

このような理想の服飾生活を「着だおれ」ることなく持続することが、京都の人たちの心意気ではなかったのだろうか。それは日常生活のつましさと引き替えに手に入れる喜びでもあった。この日常生活のつましさを江戸者は吝嗇と揶揄した。京の女たちは、これを「しまつ」と言ふ。それは四季の行事、物見遊山、慶弔儀礼など、その時々理想の服飾美を実現させるためにする「しまつ」なのである。それらは人目を気遣う晴れがましい場面である。「都は目はづかし田舎は口はづかし」（『毛吹草』）の世諺は、京の人たちの審美眼のきびしさを言ったものと思われるが、この「都は目はづかし」の意識が、「しまつ」という生活態度を土台にしながら、他郷人には「着だおれ」といわれる美的服飾生活を展開させたのであろう。「京の着だおれ」といわれた時、京の人たちはもう「着だおれ」ない人たちになっていた。しかし、「着だおれ」た人たちの服飾生活の美の理想を理想として追いつけたのである。ここに江戸者たちが「京の着だおれ」の世諺

を引き合いに出しながら評した京の人たちの美装への執着、服飾美の実態が存したのであろう。そして、「京の着だおれ」という言葉の意味そのものの虚と実も、ここにあるのではなからうか。

(1993年7月28日受理)

注

(1) 東洋文化社、秋山十三子、大村しげ、平山千鶴共著

(2) 駸々堂 『京のおんな』 昭和46年刊

(3) 「都道府県庁所在都市

1世帯当たり年間の品目別支出金額」より

年 度	地 域	消費支出	被服費	和服類	洋服類	絹 着 尺 地	被服費 消費%
1962	東京	567,118	75,220	5,832	17,828	2,173	13.26
	大阪	484,310	59,709	5,512	15,078	1,568	12.32
	京都	471,005	57,245	3,463	14,702	794	12.15
1967	東京	848,185	101,553	8,696	26,000	2,860	11.97
	大阪	781,324	85,589	6,939	22,571	2,390	10.92
	京都	736,832	73,130	4,039	18,048	2,735	9.92
1972	東京	1,347,534	156,492	13,896	48,827	3,234	11.61
	大阪	1,130,074	126,738	16,907	37,187	1,220	11.21
	京都	1,195,625	140,490	14,240	39,414	5,867	11.75
1977	東京	2,552,554	261,246	13,705	93,170	4,766	10.23
	大阪	2,279,920	253,295	39,644	76,122	5,898	11.10
	京都	2,376,366	245,955	17,625	90,035	3,596	10.35
1982	東京	3,430,442	268,350	25,002	105,088	3,543	7.82
	大阪	2,909,867	220,366	14,120	84,822	3,919	7.57
	京都	3,051,646	231,968	27,844	85,363	2,683	7.60
1987	東京	3,961,554	313,725	26,711	126,640	2,286	7.91
	大阪	3,215,083	238,149	12,685	90,064	801	7.40
	京都	3,347,653	257,527	13,252	94,870	2,336	7.69
1991	東京	4,529,132	392,617	28,115	164,965	452	8.66
	大阪	3,791,935	267,169	16,971	109,742	343	7.04
	京都	3,599,215	244,371	4,585	101,758	710	6.78

総理府統計局家計調査年報による

(4) 浅草田原町三丁目生まれ、父は板木職であったという。

(5) 大田南畝が、当時の大坂の様子を上方の文人・田宮慮橋庵に問うて記述した。

(6) 江戸在住の武士と思われる。元治元年(1864)正月から数ヶ月間の在京中の見聞を書き記した。

(7) 『老の樂抄』寛保元年(1741)二代目市川月十郎柏菴の日記を享和2年(1802)山東舎主人が抄録。

「京の名物

水、水菜、女、染物、みすや針、寺と豆腐、黒木、松茸」

。『見た京物語』天明元年(1781)二鐘亭半山「多きもの寺、女、雪踏直し」

「女の小袖多くは裏にもやうあり。縫など入れたるもあり。」

- 。『改元紀行』 享和元年(1801) 大田南畝  
 「粟田口にいれば、左に御仕置場あり。車道ありて、牛車のきしりゆくさまめづらし。往来の男女のありさまも、目なれしひなのよそほひにかはりて、都の手ぶりきらきらしく、漸く長安に近きをしるといひし唐詩の心なるべし。」
- 。『羈旅漫録』 享和2年(1802) 滝沢馬琴  
 「京によきもの三ツ。女子、加茂川の水、寺社。あしきもの三ツ。人気の吝嗇、料理、舟便。」
- (8) 本名、穴戸鉄舟、播州佐用郡佐用姫神社の神職で20才の時、京に出て、和漢の学を修めたが、悪事をなし、後、東都に下り捕えられ、遠島になったという。
- (9) 染織関係のものを取り出してみる。  
 「摺絵縫 薄物 帽子 結鹿子  
 「紺染 梅染 茶染 藍染 紗羅染  
 「揉紅梅 蘇芳染  
 「西陣撰糸 厚板物 綾織 金欄 唐織 紋紗戻、絹縮 木綿羽織地 同袴地等 色絲 絹糸 舟橋吉岡染  
 「木下紫染 柳原絹 本新在家亀屋嶋 似紺染 新在家羽二重 羅板物 立売溢染物  
 「茶入袋 紗織物 三条袈裟 衣蚊帳 繕綿  
 「道場襪子 綾小路木綿足袋 精好 梅汁 諸方染屋 丹後織絹袖 堀川紺形 溢染物 小川組緒 紐 織帶等 憲法染 織絞  
 「東洞院三本木ニムク練
- (10) 「。絹帛。巻物。金欄唐織。絵絹。木綿。倭錦。布。紙衣。洪紙。蚊帳。紅梅。吉岡染。結鹿子。絲具」の項がある。
- (11) 日本古典文学大系『西鶴集上』 脚註によると寛文初年の風水害によるとされる。
- (12) 能『放下僧』より「面白の花の都や筆に書くとも及ばじ」  
 『東北』より「出で入る人跡かずかずの袖をつらね裳裾を染めて色めく有様はげにげに花の都なり」  
 『熊野』より「誰がいひし春の色、げにのどかなる東山。四条五条の橋の上、老若男女貴賤都鄙、色めく花衣、袖をつらねて行く末の、雲かと見えて八重一重、咲く九重の花盛り、名に負ふ春の気色かな、名に負ふ春の気色かな。」
- (13) 平凡社刊 東洋文庫 齊藤信訳による。
- (14) 日本古典文学大系『西鶴集上』 脚註より、「かの縄麻呂の歌に、多枯の浦底さへ匂ふ藤波を、藤波をかざして行かん見ぬ人のためと詠みたりし、此花を心なく詠じ給ふはうらめしや」
- (15) 日本古典文学大系 『西鶴集下』による。  
 「むかしは大名の御前かたにもあそばさぬ事、おもへば町人の女房の分として、冥加おそろしき事ぞかし。(略)かゝる女の寛活、能々分別しては、我と我心の耻かしき義なり。明日分散にあふても、女の諸道具は遁るゝによって、打つぶして又取つき、世帯の物種にするかと思はれける。」
- (16) 京都市編 『京都の歴史』5巻「近世の展開」では、『柳宮日記』を引き、この件を述べている。
- (17) 「内蔵介の世盛り」の項より、「……是光琳が物数寄にて、妻室は幾篇着替るとも、同色の羽二重然るべし、其の代りに侍女に随分結構なる内室の衣装を着せられよと、指図せしとなり、去ればにや、始の程はさも無く見えしが、倩見る程中村の出立抜群にて、一座蹴押され、自らふし目になりぬ……」
- (18) 『喜遊笑覧』は、『武野燭談』を引いて、その衣裳くらべの様子を描いている。
- (19) 日本古典文学大系 『西鶴集下』 脚註による。